



元気っ子

No 313 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

第105回全国高等学校野球選手権記念大会は神奈川県代表の慶應義塾高校が第2回大会以来、107年振り2回目の優勝で幕を下ろしました。決勝戦は昨夏優勝の仙台育英高校との大一番、多くのファンは仙台育英高校の夏連覇を予想していたかもしれません。かくいう私も、開幕前から仙台育英高校の夏連覇を予想していました。ところが、ふたを開けてみれば慶應義塾高校、丸田君の先頭打者 HR を皮切りに8-2と仙台育英高校を圧倒しました。

また、応援合戦については、報道等でも賛否両論ありますが、決勝戦での慶應義塾高校の応援団はこれまでに感じたことのない「圧」がありました。通常、応援席はアルプススタンドですが、この日はレフトスタンド、三塁アルプス席、三塁内野席の全てを慶應義塾高校の応援団が埋め尽くし、大音量、そしてスタンディングで「若き血」を熱唱していました。まるで神宮球場に六大学野球を観に来ているかのようで、まさにスタジアムが揺れるような感覚でした。「エンジョイベースボール」を掲げて指導をされた高林監督をはじめ、慶應義塾高校の選手ならびに関係者の皆様、本当に優勝おめでとうございます！

応援で言えば、今大会にはこんなエピソードもありました。8月16日の第四試合、千葉県代表専大松戸高校と茨城県代表土浦日大の一戦です。この日は台風の影響で東海道新幹線のダイヤが大幅に乱れていました。専大松戸高校の応援団は当日の甲子園入り予定していましたが、結局試合が終わるまで甲子園に入ることができませんでした。新幹線の中で敗戦の報告を聞いた応援団は泣き崩れていたそうです。ですが、新大阪駅に着いた時には、気丈にもたくさんの感動をくれた野球部に対して感謝の言葉を表していました。このことを知った仙台育英高校応援団は準決勝の鹿児島県代表神村学園との一戦で、専大松戸高校の無念を晴らそうと、急遽、専大松戸高校のチャンステーマ「エルティグレ」の楽譜を手に入れ、ぶっつけ本番で演奏しました。この演奏で涙した高校野球ファンは多かったのではないのでしょうか。

強打者としては、大会前から長距離砲として注目を集めた三選手がいました。岩手県代表花巻東高校の佐々木君、広島県代表広陵高校の真鍋君、そして福岡県代表九州国際大付属高校の佐倉君でしたが、甲子園ではその一発を拜むことは叶いませんでした。今後の活躍に期待をしたいと思います。

投手陣については今年は例年に比べて豊作だったように思います。甲子園不出場組では、横浜高校の杉山君、大阪桐蔭高校の前田君、また甲子園出場組では沖縄尚学高校の東恩納君、神村学園高校の黒木君など、プロで見てみたいと思える好投手がたくさんいました。

そして今年も見せて、いや、魅せてくれました。佐賀県代表鳥栖工業高校と富山県代表富山商業高校の一戦で、富山商業高校のセカンド白木君とショート竹田君のいわゆる「アライバプレー」は惚れ惚れするような連係プレーでした。日頃から仲間を信じ、アウト一つの重みを大切にしているからこそそのプレーだったと思います。

今年も恒例の9月号は夏の甲子園の振り返りになりました。関心のない方には「箸休め」的に流し読みして頂けたらと思います。私としてはまだまだ語り尽くせていませんので、いつか、ながさわ保育園高校野球観戦部と高校野球ファンの皆様とで「夏の甲子園振り返りナイト」などやってみたいと思います（笑）

また来月からは全国の高校球児に負けない熱さで保育を語って参りたいと思います。